

## ロシアの朝鮮半島政策－北朝鮮核問題を中心に－

アンドレイ・ランコフ<sup>1</sup>

ソ連とソ連解体後のロシアは、「北朝鮮の同盟国」と説明されることが多い。だが、その説明は、良く言っても誤解を招く説明であり、悪く言えば間違った説明である。北朝鮮とソ連およびソ連解体後のロシアとの関係は、単純なもの、あるいは特に密接なものでは決してなかった。

1945年－48年、ソ連軍の支援を受けて北朝鮮という国家が誕生したのは事実である。ソ連のソーシャル・エンジニアリングの産物であった北朝鮮は、誕生してから数年間、本質的にはソ連寄りの衛星国家に留まった。だが、ソ連の衛星国家の指導者に選ばれた、満州出身の有能な、そしてカリスマ的なゲリラ司令官の金日成は、将来の北朝鮮について異なる考え方を持っていた。彼は、ソ連の（どのような国家の）操り人形になるつもりはなかった。彼は良い共産主義者であったかもしれないが、恐らく、民族主義者の色彩の方が強かったと思われる。彼の世界観においては、共産主義より民族主義の方が重要だったのである。

それゆえ、1950年代にチャンスが訪れると金日成はソ連から距離を置き始めた。その複雑な－しかし最終的には成功した－策略が可能になったのは、とりわけ、1950年代に中国とソ連の関係が悪化したためであった。また、スターリン主義の時代、ソ連は旧衛星国家に対して高圧的な手法を取っていたが、その後のソ連の指導者たちがその手法を受け継ぐことに消極的であったことも、金日成の策略に味方した。1950年代の金日成は、その新たな国際環境を利用し、ソ連と中国の政治家たちを出し抜いて、最終的には共産圏における独自の体制を確立したのである。金日成は、ソ連と中国を巧みに操り、両国から極めて重要な経済・軍事援助を得る一方で、両国が北朝鮮から意味のある政治的譲歩を引き出すことを許さなかったのである。

<sup>1</sup> 韓国国民大学教授。

その危険な外交ゲームを行なったのは、巧みな技術を持っていた金日成である。彼の成功は、ソ連の指導者たち、ならびにソ連の国民の間に強い不快感を発生させた。恐らく、北朝鮮は1960年代後半から、ソ連の中で最も人気の低い共産主義国家になった。当事のソ連に存在していたほぼすべての重要なイデオロギー的・政治的集団は、金日成を、そしてその政策を嫌悪していた。党の高官も官僚も、金日成が好きではなかった。というのは、彼らは、金日成はソ連の利益を考えようとせず、誤解を与えるような、あるいは野心を煽るようなプロジェクトにソ連の援助を浪費する、信頼できない、そして人を躁るのに長けている「政治的盟友」である、と考えていたからである。再び出現したロシアの民族主義者たちにとって、金日成は恩知らずの指導者であった。一方、改革主義者たちにとって、金日成の政府は、ソ連に存在していたあらゆる残忍な慣行と不十分な構造を最も極端な形で具体化した政府であった。誰もが北朝鮮の不鮮明な国家主義を、とりわけその個人崇拜を嫌悪していた。

それらの否定的な感情は、北朝鮮からも発生した。北朝鮮の指導者たちはソ連の政策もイデオロギーも好きではなく、自国からソ連の影響力を排除するのに熱心であった。北朝鮮の指導者たちは、ソ連はイデオロギー的汚染の発生源になり得ると考えていた。金日成は、スターリンの死と新たな指導者層の台頭によってもたらされた、より自由な、そして抑圧性の少ない共産主義のバージョンを決して受け入れなかった。北朝鮮にとって、スターリン後のソ連は、イデオロギー修正主義および熱狂的の大国主義の前兆的存在であった。北朝鮮の指導者たちは、ソ連の国民および文化との過度の交流を通して北朝鮮の人々が異質かつ危険な思想に触れるようになることを恐れた。彼らは、同時に、ソ連は弱い国を抑圧する愛国主義的な国家であり、自国の利益になるときはイデオロギー的同盟国を支配・利用しようとする、と考える傾向にあった。

そのような相互嫌悪の状態にありながら、両国政府は団結と友愛のイメージを保つために苦勞した。結局のところ、すべてが異なっているどころか、あからさまな敵意を抱いていたにもかかわらず、彼らはお互いを必要としていたのである。北朝鮮にとって、ソ連は極めて重要な経済援助の大きな、そして時に

は唯一の提供国であった。国内の経済状況は着実に悪化していたので、その援助の重要性は増加した。だが、北朝鮮政府がその重要性を認めることは決してなかった。

ソ連にとって、北朝鮮はロシア極東部の戦略的に極めて重要な部分を守る緩衝国家として、また米国からの攻撃に対する有用な防波堤として大きな価値を持っていた。更に、北朝鮮が米軍部隊を韓国に釘付けにしていたことも役立った。というのは、そうでなければその部隊は欧州またはその他の場所に配置され、ソ連に対するより直接的な脅威を与えていた可能性があったからだ。同時に、ソ連は1960年代の早い時期から、他の共産主義国家が中国に同調するのを防止するためにあらゆる手段を講じようとした。ある意味において、北朝鮮に提供された援助は賄賂であった。ソ連の外交官たちは、論争の中で北朝鮮をソ連側に繋ぎ止めておく真の方法がないことを理解していたが、北朝鮮を中立的な立場に立たせるために援助を行なうことには意味があると考えていたのである。

ソ連は、様々な戦略地政学的利益を守るためには、北朝鮮を破綻させない必要があると判断して（あるいは真に理解して）いたが、北朝鮮を友好同盟国であると見なしたことは決してなかった。1980年代後半、ペレストロイカによって地政学分野におけるソ連の考え方が再編成されたとき、ソ連の指導者たちは、躊躇することなく北朝鮮を切り捨てることを決定した。

1980年代後半に出現しつつあった新たな世界において、米国はもはやライバルとはみなされなくなった。それどころかソ連の国民の大半、ならびに共産主義後のロシアの政治家たちの多くは単純にも、ロシアが経済的・政治的な変革に伴う困難を克服する一方で国際的な超大国の地位を維持することを、米国はあらゆる手段を講じて支援してくれると考えていたのである。中国－ソ連間の対立も、ソ連の政治的計算において重要な役割を担うことはなくなった。そして1989年になると、中国との関係は再び改善したのである。それゆえ、北朝鮮への更なる支援は不必要となった。

北朝鮮への援助を中止する決定を後押しした大きな要素は、狂気のスターリ

ン主義国家であると広く考えられていた北朝鮮への嫌悪感ばかりでなく、他の現実的ないくつかの考慮によるものであった。1990年代の初期、北朝鮮の体制が長続きすると考えていた人は、ロシアにはほとんどいなかった。当事、大半の専門家は、北朝鮮の体制が持ちこたえるのはせいぜい3、4年であると考えていた。共産主義の政府は世界の至るところで崩壊していた。専門家たちにとって、北朝鮮の体制は共産主義国家の中で最も非論理的で、最も異様で、非効率的に見えた。従って、北朝鮮はチャウシェスクのルーマニアおよびホーネッカーの東ドイツの後を辿る運命にあると考えるのは、極めて理論的だったのである。

金日成は、1994年に安らかな死を迎えた。そして、広く予想されていた彼の体制の暴力的な崩壊は決して起こらなかった。だが、その「何も起こらなかったこと」さえ、ロシアにある程度質の高い文学を発生させた。歴史家で作家のレフ・ヴェルシーニン (Lev Vershinin) は、想像上の共産主義的専制国家の暴力的な崩壊を描いた『エンドゲーム (Endgame)』という小説を書いた。その小説に登場する国家は、読者にルーマニア、キューバ、そして北朝鮮を連想させた。地名さえ、言語学的歴史のあらゆる法則を故意にミックスさせたようなもので、その想像上の国家の名前は朝鮮語のような響きを持つ「Taedongan」、そして、そのスターリン主義者が最後の絶望的な抵抗を行なった場所の地名は「Munch'on」であった。ほぼ同じ時期、恐らく1990年代にロシアで最も人気があったと思われる風刺詩人のイーゴリ・イルテニエフ (Igor Irteniev) は、多くの人々が間もなく起こるであろうと考えた出来事を、からかうように次のように描いた。「私は、いまだに鎮静剤なしには眠れない／危険な暗闇の中／私は金日成に起こることを想像し続けている／死刑執行人たちの血まみれの手中で」<sup>2</sup>。

それゆえ、北朝鮮は厄介で運の尽きた国と見なされ、以前からの援助方針は打ち切られた。援助の劇的な減少はソ連邦崩壊以前に始まっていたが、1992

<sup>2</sup> Irteniev, Igor. Riad dopushchenij [A number of assumptions]. Moscow, *Nezavisimaia gazeta*, 1998, p.154.

年以降はそれが更にエスカレートした。北朝鮮とソ連との間の貿易額は、1990年は21億米ドルだったが、それから4年後にはわずか1億4,000万ドルに落ち込み、それ以後はその水準が続いている。

1990年代半ばになると、北朝鮮に対するロシアの態度が徐々に変化していることが認識された。その変化をもたらしたのは、二つの異なる傾向であった。第一は、ロシア自身の共産主義後の社会への移行が、大半の人々がかつて希望したほどスムーズでも順調でもなかったことである。共産主義時代の後に繁栄がやってくるという期待は、打ち砕かれた。1990年ごろ、ソ連の国民の大多数は、「共産主義のくびきから解放された」ロシアは、直ちに、西欧諸国や米国と同等の生活水準がもたらされる国になる、と期待していた。言うまでもなく、それは本当に甘すぎる期待であった。だが、ロシアの経済が下方スパイラルに陥り始めると（その状態は1990年代後半まで続いた）、多くの人々は外の世界に対する当初の態度を考え直し始めた。北朝鮮は、依然として批判の対象となるべき国家と見なされていたが、その批判の声は以前と比べると小さくなったのである。

反米感情の高まりもその変化に貢献した。米国は、潜在的な同盟国でもなければ世界の民主主義と繁栄を無私無欲で守る国でもない、と見られるようになった。それどころか、ロシアの一般大衆は、米国は狡賢い略奪者であり、ロシアの弱体化につけこみ、ロシアの合法的な勢力範囲に侵入してくる国であると思い始めた（ロシアの一般大衆は、多少なりとも、以前ソ連邦に属していた諸国はすべて同国の合法的な勢力範囲の中にある、と考えていたし、現在もそう考えている）。その新たな状況下で、すべての反米勢力はロシアの共感を得ることになった。極めて好戦的な発言を行っていた北朝鮮も、その例外ではなかった。

ロシアの政策立案者たちの北朝鮮に対する姿勢を軟化させたもうひとつの理由は、1990年代に北朝鮮の体制が示した驚くべき回復力であった。援助の中止は、経済的な大変動と飢餓を引き起こした。だが、誰もが驚いたことに、金一族の世襲の独裁政治はその危機を乗り越え、支配を続けた。1990年代後半

以来、北朝鮮の体制は将来のかなりの期間にわたって存続する可能性が高いとの考え方が増大した。また、長期的に見れば、その体制の存在はロシアに一定の利益をもたらすかもしれない、との認識も生まれた。

ソ連後のロシアの学識のある人々の大半にとって、北朝鮮は依然として残酷かつ非効率な専制国家のほぼ完璧な例であったが、1990年代の中ごろから、ロシアの学術論文の中で北朝鮮への批判が消え、この極めて特異な社会への西欧諸国の無神経な対応方法に対する批判が高まったと伝えられている。北朝鮮を無視してきた以前の政策は、「非生産的」および「近視眼的」であったと批判されることが多くなったのである<sup>3</sup>。そのような背景の中で、北朝鮮とロシアとの接触は増加していった。

こうした変化は、プーチン大統領の下でより明確になった。プーチンは、「強く自信のあるロシア」を構築することが自分の主要な外交政策目標であると発言した。2000年の2月、北朝鮮とロシアは1961年の条約に取って代わる善隣友好協力条約を締結した。2000年の条約は1961年の条約とは異なり、両国間の軍事同盟についての規定はなかったが、それでもなお特別な重要性を持っていた。というのは、北朝鮮に対するより積極的な姿勢が表明されていたからである。

さらに重要な意味を持っていたのは、2000年7月にプーチン自らが北朝鮮を訪問したことである。彼は、北朝鮮を訪れたロシアの、あるいはソ連の最初の国家元首になったのである。皮肉なことに、ソ連時代の書記長は「友好」や「同盟」を謳いながらも、北朝鮮を訪問しようとはしなかったのである。金日成もロシアを2回訪れた。2001年8月、彼は鉄道でロシアを横断し、ピョンヤンから遠路はるばるモスクワならびにペテルスブルグまでやって来たのである。その長い、異常とも言える旅は、シベリア地方にある程度のトラブルを発生させた。というのは、重要な路線において通常の交通に深刻な混乱をもたらしたからである。だが、それでもなお、その訪問はあらゆる象徴的意味を持って

<sup>3</sup> こうした見解として、例えば以下のように上級外交官や学者たちがそのような趣旨の発言を行なっている：Georgyi Toloraya. *Koreiskii poluostrov i Rossia* [Korean Peninsula and Russia], *Mezhdunarodnaya Zhizn'*, December 2002.

た（更に、外交官の私的な見解によると、共産主義後のロシアに対する金日成の認識を変えるのに貢献した）。2002年の8月、金日成は再びロシアを訪問した。そのときの旅は極東地域に限定されたが、彼はそこでプーチン大統領との首脳会談を行なったのである。

それでは、ロシアの対北朝鮮政策の主要な目標はどこにあるのだろうか。真に経済的な観点からその状況を見るならば、現在のロシアは北朝鮮には重大な経済的利益を有していないという事実を否定するのは困難である。実際のところ、ロシアが北朝鮮に経済的利益を有したことはこれまで一度もなかったのである。

2008年の北朝鮮の対外貿易額（朝鮮半島内の貿易は除外）は45億米ドルに達した。同じ年の北朝鮮－ロシア間の貿易額は、1億4,000万ドルに過ぎなかった。換言すれば、ロシアとの貿易額は北朝鮮の総貿易額のわずか2.9%だったのである。その状況は、両国間の貿易額が北朝鮮の総貿易額の半分にも達していた1980年代の状況とは対照的である。現在のロシアが北朝鮮の貿易相手国として（中国、韓国、EUに次いで）第4位の位置にあるのは事実だが、それはかなりかけ離れた4位であることを忘れてはならない<sup>4</sup>。また、その貿易構造は、北朝鮮の非重要性も反映している。ロシアからの輸出品目の大部分（約85%）は石油である。また、注目に値するのは、過去15年間、総貿易額には変化がなかったことである。1994年以降、貿易額は1億5,000万－2億ドルで推移し、増加する兆候は現れなかった。

両国の関係の中で、北朝鮮の負債は依然として問題になっている。約88億米ドルに達するその負債が近い将来、支払われる可能性は少ない。貿易関係の再構築についての考え方が一時的に協議されているが、それが成功するチャンスはあまり多くない<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> 2009년 북한 대외경제 전망, 서울: 대외경제정책연구원, 2009.

<sup>5</sup> 両国間の現在の（惨めな）貿易状況に関するいくつかの報告については、Nemov A.F. Osnovnye problem vo vzaimootnosheniiah Rossiiskoi Federatsii i KNDR [The major problems in the relations between Russian Federation and DPRK]. In *Rossia and Korea*. Moscow: Russkaia panorama, 2008. 参照。

特に北朝鮮の鉱物資源がロシアの関心の的になっている可能性があることは、しばしば指摘されている。事実、過去 10 年間、ロシアのいくつかの鉱業会社は北朝鮮に調査団を派遣している。だが、資源に飢えている中国にとって北朝鮮は魅力的な存在かもしれないが、シベリアを自由に活用できるロシアにとって、北朝鮮はそれほど魅力的な国ではない。各調査団の訪問は、非常に似通った結論を導き出した。それは、北朝鮮にはまずまずの質の鉱物がある程度、存在しているが、それらの資源の調査・開発は鉱業会社にとって費用効率が高いものではない、という結論である。というのは、極めて高額な投資が必要になるからである（その理由の大部分は、まともなインフラがほぼ完全に欠如していることにある）。同じ金額をロシア国内に投資すれば、費用効果がより高くなると思われる。それは、未活用の鉱物資源がまだ多く残されている上に、皆無ではないにしても、政治的なりスクが北朝鮮に比べて極めて低いからである。

意外なことに、ロシアの企業は、北朝鮮が保有しているもうひとつの主要な商品—比較的熟練しているが低賃金の労働力の豊富な供給—にはほとんど興味を示していない。ロシアの企業は北朝鮮への大規模なアウトソーシングは行なっておらず、近い将来に行なう可能性も少ない。その理由の一部は、ロシア国内の安価かつ十分な労働力にアクセスできることだが、理由の大部分は、ロシアで現在行なわれている製造活動の種類がアウトソーシングに適していないことにある。

ロシアの企業が北朝鮮の労働力を必要とする場合は、ロシア国内でその労働力を使用することになるだろう。事実、労働力の継続的な貿易が、両国間で成功している唯一の共同経済プロジェクトなのかもしれない。ロシアの極東地域では労働力が慢性的に不足しているので、労働関連機関は常に他の地域から労働力を補わざるを得ない状態になっている。そこで、1960 年代後半から、北朝鮮の大量の伐採者がロシアに送り込まれているのである。今日、およそ

10,000 人の北朝鮮労働者がロシアの極東の様々な企業に雇用されている<sup>6</sup>。

簡単に言えば、経済に関する限り、ロシアに提供すべきものは北朝鮮にはまったくと言えるほど存在しておらず、北朝鮮にはロシアの輸出品に対する支払い能力もないのである。ロシアの企業は、北朝鮮にはほとんど関心を持っておらず、近い将来、彼らとその姿勢を変える可能性は少ない。その状況は、ロシアと北朝鮮との間の長年にわたる貿易の停滞によって良く表わされている。それは、中国－北朝鮮間の貿易が活況を呈しているのとは極めて対照的である。貿易額の 20：1 の相違は（それぞれ、28 億米ドルと 1 億 3,000 万ドル）、二つの主要な隣国と北朝鮮との関係が持つ経済的価値の差を反映していると言っても過言ではないだろう。

ロシアから見ると、北朝鮮はロシアの貿易の中継地点としての役割を果たす可能性がある。現在までにロシアで検討された北朝鮮の主要な三つの経済プロジェクトが同じような性質を持っているのは偶然ではない。それらのプロジェクトは、すべて北朝鮮を中継地点として使用するプロジェクト、すなわち、朝鮮半島縦断鉄道、朝鮮半島縦断パイプライン、そして高電圧の給電線のプロジェクトである。

それらのプロジェクト（特に鉄道接続計画）については、幅広く論議されている。新聞では楽観的な報道がなされているが、状況を詳しく見てみると、それらのプロジェクトは報道の内容よりかなり複雑である。このことを十分に示す例を提示しよう。鉄道を接続させるための話し合いは 1990 年代の後半から行なわれている。現在は、2010 年の末である。だが、過去 10 年間、このプロジェクトでは何の進展も成されなかったのである。ロシアの国営鉄道会社がある程度の調査を実施し、北朝鮮に事務所を開いたのは事実である。だが、それらの限定的な活動は、プロジェクトを実際に始動させる活動とはかけ離れていた。パイプラインと電力網に関する提案も、本質的には同じような状況であった。多くの話し合いは行われたが、実際の行動はほとんどなかったのである。

<sup>6</sup> その取決め、ならびにロシアの北朝鮮労働者に関する詳細情報については、Zabrovkaia L.V. KNDR-Rossia-RK: obmen trudovymi resursami [DPRK-Russia-RK: exchange of labor resources]. *Demoscope*, No. 333-334, 19 May 2008 を参照。

それらの遅れの背景には、十分な理由がある。すべてのプロジェクトには潜在的な経済価値があるものの、高い政治的リスクと高いコストとの好ましくない組み合わせを考えると、得られる利益はそれほど大きくないように思える。また、プロジェクトの費用はすべて高額になり、数十億もの米ドルを投資しなければ経済的な結果をもたらさないだろう。

中継プロジェクトが困難であることを示す好例は、韓国とロシアの鉄道網を接続することが提案された朝鮮半島縦断鉄道プロジェクトである。このプロジェクトについての話し合いは1997年—98年に開始され、北朝鮮、韓国、そしてロシアの指導者たちによる一連の会談が行なわれた後、2000年に集中的な協議が行われた。2001年以降、ロシアの代表団は韓国と北朝鮮を頻繁に訪れ、プロジェクトについての協議を行なった。代表団は、このプロジェクトは大きな利益をもたらすと主張した。ロシア鉄道省の副大臣であるアレクサンドル・ツェリコ (Alexander Tselko) は、2001年にソウルを訪れた際、「現在までのところ、20フィートのコンテナ1個を釜山から中国大陸横断鉄道 (TCR) を経由してドイツのハンブルグまで送るのに1,344ドルかかっているが、(このプロジェクトが完成すれば) ハサン (Khasan) からハンブルグまでの運送費はわずか889ドルになり、約400ドルの節約になる」と述べた<sup>7</sup>。

ロシアの高名な研究者であり上級外交官でもあるゲー・デー・トララーヤ (G.D.Tolaraya) は、同プロジェクトについて次のように書いている。「地政学的な観点から見れば、このプロジェクトは非常に効率的である。それは、欧州—アジアの陸橋を作り出す機会をもたらし、東アジアにおけるロシアの政策バランス (現在は中国および日本との関係が支配的である) を「是正し」、アジアにおける「ロシア」の立場を強化し、近隣地域における緊張を緩和させることになるだろう」<sup>8</sup>。

<sup>7</sup> *Korea Times*, 12 February 2001. その日以降、それらの数字は頻繁に引用されるようになった。

<sup>8</sup> Tolaraya G.D. *Mezhndunarodnye infrastrukturye proekty i pozitssii Rossii v Vostochnoi Azii, na primere Koreiskogo poluostrova* [International infrastructure building projects and Russia's position in East Asia, the case study of the Korean peninsula]. *KoRusForum*, March 2007. Retrieved at <http://www.korusforum.org/PHP/STV.php?stid=14> から引用。

すべてが良いことづくめのように思えるが、詳細に調査してみると、この鉄道プロジェクトについての問題点が明らかになってくる。第一に、北朝鮮の指導者たちは、韓国の貨物列車が北朝鮮の鉄道の駅を定期的に通過するのを快く思っていない。彼らは、明らかに、北朝鮮の民衆が、その列車の光景を見ただけで韓国経済の規模と質を認識してしまうことを恐れているのである。このプロジェクトに反対するもう一つの政治的要素は、港湾都市であるウラジオストクから発生する。この都市の当局は、提案されている鉄道の接続によって貨物が失われることに反対しているのである。

しかしながら、主要な問題はプロジェクトの多額の費用である。このプロジェクトを実現させるためには、北朝鮮の鉄道網を完全に作り直す必要がある。その鉄道網は、運用の質が悪い上に、完全に時代遅れの(1930年代ではないものの、50年代の)技術が使用されているのである。ロシアの技術者が最近調査したところによると、技術の徹底的な近代化を行わない限り、北朝鮮の鉄道は交通量の増加に対応できないことが明白になった。技術者の見積もりによると、その再建費用は少なくとも25億米ドルに達する<sup>9</sup>。

だが、その見積もりは、ロシアの国営鉄道会社が行なったことを忘れてはならない。その会社は、費用を低く見積もることに利益を有しているのである。また、多くの場合、大規模なインフラ・プロジェクトのコストは当初の見積り額より高くなる傾向があることを考えると(更に、上記の見積り額は約15年前に出されたことを考えると)、そのコストは少なくとも40億－50億ドルに達する可能性がある。ロシアの国営鉄道会社、あるいはロシアの一般的な企業は、その種の資金を北朝鮮には絶対投資しないと思われる。というのは、他の場所に投資すれば、より良い結果を得られる可能性があるからだ。

多くの話し合いが行われているもうひとつの協力プロジェクトは、ロシアのガス田と韓国の顧客とをつなぐパイプライン・プロジェクトであり、北朝鮮が

<sup>9</sup> *Stroitelnaia gazeta*, 19 January 2007; *Naeil sinimun*, 28 May 2007.

補助金を受ける顧客として参加する可能性がある<sup>10</sup>。だが、そこにも同じ問題が存在している。多額の投資が必要だが、この地域の政治的安定性とプロジェクトの最終的な収益性が依然として不透明なのである。鉄道のプロジェクトと同様、ロシアの企業は、政府の資金および／または保証が得られるならば、何らかの事業に着手するかもしれないが、予測可能な将来において、そのような資金提供や保証が行われる可能性は少ない。

恐らく、実行可能性が最も高いプロジェクトは送電線プロジェクトだろう。送電線プロジェクトは複雑な三者合意の一部として利用される、あるいは北朝鮮を通過してロシアで生産した電力を韓国に供給するために使用される可能性がある。そのプロジェクトは、鉄道あるいはパイプラインのプロジェクトに比べると安価だが、それでもなお費用が発生すると共に、この地域における一定のレベルの政治的安定性が必要となる。

状況は、大きな政治的リスクの存在により、更に複雑になっている。実際、鉄道の建設（更に言えば、パイプラインおよび／または電力網の建設）が本格的にスタートした場合、それは、投資家たちが不安定かつ予測不能な政治状況の人質になることを意味する。ひとたび資金を投入すれば、その資金を取り戻すのはほぼ不可能になる。従って、投資家たちは、北朝鮮政府の好意的な態度（ならびに、米国のリスクを伴う活動がないこと）に、完全に依存することになる。北朝鮮の体制との交流についての過去の経験を指針にするのであれば、北朝鮮政府は、投資家たちには後戻りするすべがないことを認識するやいなや、あらゆる方法で条件を変更し、恐らく、北朝鮮の国土を通過する権利に対する支払いを増額するよう要求してくると思われる。公平なゲーム、および「*pacta sunt servanda*」（合意は守られなくてはならない）という考え方は、北朝鮮の指導者たちには無縁なのである。投資の規模を考えるならば、そのような環境下で前進する決定を行うのは、明らかにリスクが高すぎることになる。

従って、北朝鮮との協力におけるロシアの経済的利益は、せいぜい投資のた

---

<sup>10</sup> この種の以前の提案のひとつについては、Selig S. Harrison. *Gas Pipelines and the North Korean Nuclear Crisis*. *Foreign Service Journal*, December 2003 を参照。

めの足場を確保しておくことにのみ存在していると言えるだろう。一方、ロシアはそれらのプロジェクトを放棄したわけではない。彼らは、それらのプロジェクトは長期的には大きな利益をもたらすことを認識している。だが、同時に、ロシアの企業は投資を確約し、直ちに多額の投資を開始しようとは思っていないのである。

もちろん、ロシア企業は、ロシア国家から明確な保証を受けることができる場合は、北朝鮮への投資により積極的になるだろう。だが、それが実現することはないだろう。ロシア政府は、そのような事業を支援しようとはしないのである。

一見したところ、ロシアのそのような消極的な姿勢は奇妙に思える。結局のところ、それらのプロジェクトは長期的にはロシアに利益をもたらすことになるからである。だが、ソ連後のロシアは、以前のUSSRとはいくつかの重要な点で大きく異なっていることを忘れてはならない。ロシアはソ連とは異なり、地政学的な利益および威信のみが動機でプロジェクトに資金を投じようとはしないのである。

従って、この地域におけるロシアの真の政治的優先事項に着目することが道理にかなうことになる。ロシアの対北朝鮮政策の真に政治的な要素について論じる場合は、ロシアとソ連は異なることを忘れてはならない。ソ連はかつて超大国であり、世界のあらゆる場所において真の、あるいは認識された利益を有していた。ソ連はまた外交政策に多額の投資を積極的に行い、ときには、自国の威信を高めるためにのみ資金を投じることも少なくなかった。だが、共産主義後のロシアは別の国である。ロシアはもはや超大国ではなく、外交政策問題については驚くほど経済的観点に立って対応している。ロシアの外交政策の先鋭的な評論家であるドミトリー・トレニン (Dmitry Trenin) は、最近、次のような発言を行なっている。「ロシアは、外交政策を資金を投じる活動としては考えていない。ロシアは、資金を投じたくないのである。むしろ、外部から

ロシアに資金を引き付けるための手段として、外交政策を考えている」<sup>11</sup>。

今日のロシアの外交政策には、地政学的優先事項の明確な階層が存在する。とりわけ、ロシアの主要な利益は、かつてソ連邦の一員であった諸国に関する利益である。ロシアにおける「旧ソ連邦諸国」と呼ばれているそれらの諸国は、ロシアの外交政策立案者たちの主な関心の対象となっている。重要性がそれよりやや低いのは、欧州連合ならびに米国との関係である。米国は潜在的なライバルであり、ロシアおよび／またはロシアの極めて重要な経済的・政治的な利益に対する重大な脅威になる、あるいは、少なくとも脅威になり得る国であると見られている。第三に重要なのは、中国である。中国に対するアプローチは、驚くほど相反したものである。中国は、ときには、特異な性質を持つロシア経済に対処することができる貴重な経済的パートナーだとみなされる。また中国は反米の姿勢を取っているがゆえに、ロシアからの大きな共感を得ている。そして、米国の世界覇権を抑制する潜在的な対抗勢力になる、と見なされることが多いのである。だが、それと同時に、ロシアの政策立案者ならびに一般大衆は中国の軍事力と政治的影響力の急速な増大に大きな不安を抱いている。中国は明白な脅威にはならないとしても、脅威になる可能性がある国であると見なされることが多いのである。

しかしながら、それらの4つの主要な地域—旧ソ連邦、欧州連合、米国、そして中国—以外の地域は重要度が低い地域と見なされており、ロシアの政策立案者たちの大きな関心を集めることはない。好き嫌いはさておき、朝鮮半島も政治的重要性が低い地域のひとつと認識されているのである。

それでは、ロシアはこの地域に何を望んでいるのだろうか。簡単に言うと、ロシアは明確な階層になっている3つの主要な目標を追求している。第一に、ロシアは安定した朝鮮半島を必要としている。第二に、ロシアは分割された半島を望んでいる。そして、第三に、非核化された朝鮮半島が望ましいと思っているのである。一見して、朝鮮半島に関するロシアの目標は、驚くほど中国の

---

<sup>11</sup> Dmitry Trenin. *Rossija i novaja Vostochnaja Evropa* [Russia and New East Europe]. Lecture delivered on the 31st of March, 2010. Retrieved at <http://www.polit.ru/lectures/2010/04/22/trenin.html>.

目標に類似している。事実、その通りなのである。だが、ロシアが朝鮮半島に置いている全体的な価値は、中国がそこに置いている価値に比べて、遥かに低いのである。

安定性は、その地域におけるロシアの政策の最重要の目標であるように見える。北朝鮮で危機が発生すれば、ロシアの利益が損なわれると想定されている。それはこうした危機が同地域における米国および／または中国の影響力の大幅な増大につながる可能性があるためである。それが、ロシアが朝鮮半島の統一にあまり熱心でない真の理由である。

北朝鮮の体制が崩壊すれば、次の2つのシナリオのうちのひとつが現実のものになる可能性が極めて高くなると思われる。それは、韓国が統一をリードするシナリオ（米国寄りの国家の誕生で終わる可能性がある）、あるいは中国が介入するシナリオ（北朝鮮に中国がコントロールする傀儡政権が誕生する）である。双方のシナリオとも、ロシアにとって特に望ましいものではない。というのはいずれのケースにしても、ロシアの実際の、あるいは潜在的なライバル国家がロシアの領土の脆弱な地域の付近でその影響力を増大させることになるからだ。

ロシアは、統一自体に反対しているわけではない。だが、現在の状況で考えられる唯一の統一シナリオは、「吸収による統一」になると判断している。それは、親米国家である韓国が、衰弱した貧しい北の兄弟を吸収するシナリオである。そのシナリオが実現すれば、ロシアの東側の国境に親米国家が誕生することになる。その結末は、ロシアの政策立案者たちにとって決して歓迎すべきものではない。

ロシアの外交官と文官がそのような発言をある程度控えているのは、十分に理解することができる。だが、彼らもときには正直になることがある。例えば、2009年、鋭い洞察力を持つロシアの高名なアナリストは、次のように書いている。「朝鮮半島における我々の利益は、米国あるいは中国の影響力の増大に

よって、更には、その両国の対立の激化によって、満たされるものではない。勢力の均衡の重大かつ好ましくない変化は、(その社会構造には関わりのない) 北朝鮮の独立の維持を含む現状維持によって避けることができる<sup>12</sup>。

従って、ロシアは現状維持を望んでいるのである。だが、ロシアは中国とは(恐らくは韓国とも)異なり、北朝鮮に多くの資源を注ぎ込もうとはしないことを理解するのも同様に重要である。ロシアの外交官は、北朝鮮に満面の笑みを提供する用意はできているが、物理的な支援は提供しようとしないう可能性がある。そのような意欲の喪失は、ある部分では前述したように外交政策に資金を費やすのに消極的な現在のロシアを反映していると共に、別の部分ではロシアの政策目標の中で朝鮮半島問題の重要性が低いことに関係しているのである。

やや意外なことに、核の拡散は今日のロシアにとってあまり大きな懸念事項ではない。核拡散は望ましくない状況ではあるが、ロシアの政治家と外交官はその問題を過度に心配はしていない。というのは、核の拡散はロシアの国益を直ちに大きく損ねるものではないと考えているからである。そのような考え方が、六者会合へのロシアの態度を決定付けている。ロシアは北朝鮮の核武装には反対しているが、北朝鮮に過度の圧力を与えようとはしていない。そのような圧力は北朝鮮の国内危機を招く恐れがあると考えているからだ。

こうした考え方は、最近の天安号事件によって確認された。ロシアの調査チームの結論は不明瞭なものであったが、それは最初から予想されていたことであった。ロシアが韓国の正式な調査結果を支持することを選択したならば、北朝鮮との関係が大きく損なわれることになっただろう(また、重要なプレーヤーとしての立場に留まることも難しくなっただろう。というのは、北朝鮮がロシアを仲介者として積極的に受け入れることがロシアにとって大きな利点になるからだ)。同時に、韓国との関係を改善することにもならなかっただろう。韓国との関係は主として経済的な関係で、本質的には相互に有益な貿易で成り立っており、多少の政治的緊張があってもその影響を受ける可能性が少ないか

<sup>12</sup> Георгий Толорая, Владимир Хрусталев. Будущее Северной Кореи: стоит ли ждать конца? *Индекс Безопасности* № 1 (88), стр.100.

らである。同時に、あまりにも挑発的であるとの韓国の見解をあからさまに否定する可能性も少なかった。従って、ロシアの反応は予想通り不明瞭だったのである。

北朝鮮の将来について、ロシアの大半の学者たちは、北朝鮮は遅かれ早かれ中国を見習い、ゆっくりとした市場スタイルの改革に着手するだろうとの期待を表明している<sup>13</sup>。だが、彼らは自らの安全が十分に確保されているとの確信を持たない限り、北朝鮮がそのような改革を行なうのは不可能になるだろうとも主張している。従って、彼らによれば現在の段階では、援助と協力がこうした改革につながる環境を作り出す唯一の方法なのである。

しかしながら、現状維持に対するロシアの関与のレベルを過大評価してはならない。結局のところ、朝鮮半島問題は全体として見れば、ロシアにとってそれほど重要な問題ではないのである。それに加えて、朝鮮半島が統一されれば前述の「三つの巨大プロジェクト」の収益性が向上する可能性が生まれる。統一後の朝鮮半島では、あるいは中国が北部をコントロールする朝鮮半島であっても、それらのプロジェクトの実行可能性が高まることになる。そのような経済的利益は、現状維持を失ったロシアの苦痛（軽度の苦痛）を和らげるのに役立つかもしれない。

## 結論

以上から、北朝鮮問題に関する限り、ロシアは比較的小きなプレーヤーだが、まったく重要性がないプレーヤーというわけでもない。前述の中継プロジェクト（その中では、鉄道接続プロジェクトが最も重要かつ収益性があるプロジェクトであるように思える）を別にすれば、ロシアは北朝鮮に多くの経済的利益

---

<sup>13</sup> 例えば、ロシアの主要なシンクタンクに所属している韓国問題の専門家であり歴史家でもある Konstantin Asmolov の論文を参照。Konstantin Asmolov, a Korean affairs specialist and historian from the major Moscow think tank: Konstantin Asmolov. North Korea: Stalinism, Stagnation, or Creeping Reform? *Far Eastern Affairs*. Jul-Sep 2005. また、実際はロシアの上級外交官であり、生涯にわたる朝鮮半島の専門家でもある Georgy Bulychev が執筆した論文も参照。Georgy Bulychev. A Long-term Strategy for North Korea. *Japan Focus*, February 2005. Retrieved at: <http://japanfocus.org/products/details/2030>.

は有していない。それは、北朝鮮にはロシアの輸出品に対して支払うべき資金も、投資に対する経済的見通しもないからである。一般的なスキームにおいて、北朝鮮はロシアの地政学的利益の戦略的に重要な部分になるとは見なされていない。従って、ロシアが現状を維持するために多くの資源を費やそうとする可能性は少ないと言える。

現在の状況は多くの緊張感を生み出しロシアを悩ませてはいるものの、考えられるすべての変革シナリオは、ロシアの利益を現在より少なくすることになるだろう。米国が支配する統一朝鮮、あるいは中国が支配する北の国家がロシアにとって厄介な存在になるのは明らかである。それゆえロシアは交渉を継続しようとしているのである。それは、交渉によって状況が大きく変化する可能性があるからではない。そのような交渉は、現状維持の状態を永続化させる可能性があるからだ（更には、その交渉への参加はロシアの政治的影響力を増加させるからである）。

同時に、ロシアにとっての北朝鮮問題の重要性を過大評価してはならない。北朝鮮はロシアの利益ならびにロシアの大戦略にとって、依然として重要性の低い存在なのである。両国間の貿易やその他の形態の経済的交流は、ほぼゼロに等しい。現状維持に取って代わる可能性がある2つのシナリオ（米国が統一朝鮮を支配する、あるいは韓国と中国寄りの北部国家に分割されるシナリオ）は、ロシアの長期的な利益に資するものではないが、地政学的な災難になることはない。ロシアは、いずれの状況にも容易に対処することができるのである。